

自分の力では逆立ちしても駄目である

群馬県 川島 治子

関東足利に川島治子さんというお嬢さんがいられた。丁度治子さんが廿一才か廿二才の時である。信州唐沢山のお別時は毎年戒浄上人によつて弁栄聖者の当時からの日時によつて八月十八日より一週間厳修されていたが、昭和四年それに参加された。その別時ではついに如来様にお目にかかる事が出来なかつたと嘆いていられたが、関東の有志の方々と上人様のお伴をして帰途につかれた。八王子で皆様と別れ、上人様とお二人で横浜線に乗り換え鎌倉の御親族のお宅に向かわれた。東神奈川駅で上人様とお別れして唯お一人となら

れたが、何んだか急に淋しくなつて、唐沢山の別時満行の時、上人様よりの別時後の心得のお話を思い出し、横須賀線の車中、上人様の仰つた通りの意地に住して真正面に如来様を憶い上げてお念じされた端的、如来様のお光明を頂かれて歡喜された。その後足利に帰つてからもよくお念仏の精進をされた。そしてその年の末遂に如来様にお目にかかる事が出来た。それでお上人様にお手紙を差し上げて、「お蔭様でこの頃ははつきりと親様の慈悲の聖容が拝めて本当に有難い」と申し送られた。（『笹本上人全集』下巻六七三頁にそれに対する上人様の御返答が載っている。）

そうなられてから後、暫くして大我に覺められた。それで次のようなお手紙を上人様に呈上された。「親様の大慈悲の聖容をお慕わしきの一念に渾身の力を込めてお念仏申しておると、忽然として何もかも無くなつて仕舞う。然しぐつすり寝込んだのかというとそうでない、はっきりと目覺めている。しかも一物もある訳でなく、色も音もない。実にこれこそお上人様が唐沢山のお別時の時仰つた時間、空間を超えた眞実の自己、永遠不滅の大我に目覺めさして頂いたのだ、と分りました」と。上人様よりこのお話を承つた時、上人様は「自分の力では逆立ちしても駄目であるが、適当な時に親様の清浄光、智慧光に照らされてすらすらと本来無一物、本来無東西の状態にして頂かれたのである。実に尊くして尊い境界である」と。

その当時、名高い大雲老師原田祖岳禪師がよく東京や北関東に巡錫されていた。上人様は老師と親交もあり、又老師の悟境を高く評価していられた。

上人様はある時治子さんに「足利に老師が時折行かれる由であるが、行かれたら一度お会いになるのもよい」と。（『全集』下巻六八〇頁にその旨のお葉書が載っている。）それで治子さんは上人のお言葉に従つて老師にお会いになった。そして二三言葉を交されたら、老師は坐り直されて仰つた。「貴女、東京に出て来ぬか。東京

の道場にやっつて来んか」と。勿論、治子さんは、三昧の念仏の一行で以て慧眼も法眼も仏眼も開ける、禅では自力による開悟を説くが、結局は自力の主体である自我が没しなければ悟りは開けない。自我が没した時、親様の清浄光智慧光に照らされて開悟するのだ。結局み親恩籠のみ光りによるのだという真理事実を知っていられたから上京はされず、その後結婚をされた。